

当別町立 弁華別中学校

生活も感動も川柳で！



片山先生と作品を応募した2、3年生

夕暮れの光が照らす帰りの道
藤井祐希

味噌汁は親の心の温かさ
類家弘揮

真似できぬ日々飲み慣れた母の味
今井里奈

卒業の別れを越えて見る未来
目黒亜莉沙

全生徒でどうしん川柳に応募

弁華別中学校（木村優校長、全校生徒16名）では、国語の授業に川柳を取り入れ、昨年は全生徒の作品が北海道新聞社の「どうしん川柳」に選ばれ、紙上で紹介されました。今回は川柳を指導している片山健先生と生徒のみなさんにお話を伺いました。

川柳は国語の授業における表現技法を養うために取り入れています。はじめは授業時間中での取り組みでしたが、校外や、家でひらめくことが多いようなので、今では全生徒が、週末や休み期間中に課題として作品づくりに励んでいます。川柳を取り入れてからは、言葉に対して関心が高まり、一つの事柄に時間をかけながら多方向から観察する

ようになったと感じています。自己表現する喜びも芽生えたようです。町主催の少年の意見発表会などにも、自主的に発表したいという前向きな姿勢が出てきたのです。3年前からは「どうしん川柳」に応募するようになり、作品が選ばれ掲載された時は、選者に言葉の響きを共感してもらえたと、生徒達の大きな自信に繋がっています。全生徒が川柳を身近に感じるようになり、昨年1年の間で全員の作品が紙上で紹介されました。

自宅でもよく料理をするという今井里奈さん（3年生）は、自分で作る味噌汁が、どうがんばっても母親の味にならないという経験を作品にしました。この作品を通して毎朝食べる家庭の味や、母親のありがたさをあらためて実感したといいます。

卒業を題材にした目黒亜莉沙さん（3年生）は、作文など書くことが苦手で、締切も過ぎてしまい諦めていました。卒業式での先輩の素敵な姿が頭をよぎり、自分もそうなりたいという素直な気持ちになった時に言葉が浮かびました。新聞に載って初めて自信がついたと話しました。

感性が出てきたと思います。はじめは私も生徒の作品にアドバイスしていましたが、生徒の実力が向上し、よい作品がどんどん生まれています。今後も言葉のもつ意味を深く考え、それぞれがタイムリーで季節感のある表現に磨きをかけていってほしいです。

片山先生は楽しそうに話してくださいました。今年も北海道新聞社の「春の学校川柳」にも応募するなど、弁中の取り組みは続きます。